

西田 今日は檀原市の育児サークル、かしの木 KIDS の代表をされています今井梨加さんにお越しいただきました。よろしくお願いいたします。

今井 よろしくお願ひします。

西田 「為せば成る、為さねば成らぬ何事も」が座右の銘と聞いたのですが、これも来年の挑戦につながる言葉なのでしょうか。

今井 想像でこれはできないだろうな、やめておこうではなく、何でもやってみようということを大切にして、思っているだけではなくまずは動いてみよう、行動してみようと私はそれを座右の銘にしています。

西田 なるほど、私も共感する部分があります。WANIMA の「やってみよう」という歌がすごく好きなのです。とにかくやってみようということで、落ち込んだ時は車でやってみよう！とやっているのですが、知っています？

今井 知っています。

西田 育児サークルかしの木 KIDS はどんな活動をされているのですか。

今井 まず原則、未就園児、1歳から未就園児の方でおおよそ同じ地域の中で紙芝居とか親子で製作したりとか派遣保育士さんをお呼んでお遊戯体操をしたりとか親子の絆を深めたり親同士の交流をしたり、子育てを一人でやるのではなくてみんなで楽しくやってみようという憩いの場にな

ればと思っせてやらせていただいています。

西田 いま、核家族化が進んで育児の相談をする人がいなくて育児に悩んでいる人が多い中での交流の場、子ども同士の交流の場、情報交換の場ということですね。なぜそういうことをしようと？

今井 私も参加する側として参加させてもらい、代表されている方のお子さんがもう小学校に上がられることから後継がないという中で、私やりましようかということから代表を引き受けさせていただきました。

西田 やはり、お母さんと子どもさんが多いのですか。

今井 お父さんで来られる方は少ないですね。今回のコロナ禍で、かしの木 KIDS 育児サークルをするということもすごく難しかったです。まず、集まるということができなくて。

西田 密になるということですね。

今井 もう今年活動を休止しようかという話も出たのですが、緊急事態宣言が出て、公園もダメになって育児サークルもなくなってしまえば子どもを連れてどこに遊びに行ったらいいのというお母さんの方が圧倒的に多かったんで三密に気をつけて活動をしています。

西田 子育てとか働くお母さんの視点で活動されているのだなとよくわかりました。今井梨加さんは来年檀原市で大きな挑戦をされるとお聞きしまし

た。政治に飛び込もうという決意をされたのですがきっかけなどを教えてください。

今井 私はもともと奈良市に住んでいたのですが、結婚を機に橿原市に引っ越しました。二人の男の子の育児と、落ち着いたところにパート勤めをはじめ、仕事と家事の両立をがんばってきました。その中で橿原市での子育てのしづらさというものを感じはじめ、こういった問題はどういうところへ訴えていけばいいのかなと思いはじめたところにある議員さんの選挙に関わりました。この議員さんが声を上げているのを目の当たりにして、政治の世界はこうやって自分の思いを発信できる場なのだなというところに大変魅力を感じ、自分でも何かできることはないかなと思いついて政治の世界に飛び込む決意をしました。

西田 なるほど。そのある議員さんがすごく影響を与えてくれたということと、自分の生活が政治によって左右されているということに気づいたのはやはり子育ての関係ですか。

今井 やはり子どもは1年1年大きくなるにつれ手がかかるのですね。橿原市では公立幼稚園が2年保育ですが、保育園とか幼稚園に預けて自分の時間を確保するもしかり、社会に進出するもしかりというところであるべく早く子どもを預けたいという中で、ああ2年保育なのか、5歳まで待た

なければならぬのか、というちょっとした不満と言いますか思いがある。

西田 女性、働く女性もそうですが、そういう人生の選択肢が狭められていると、それが政策に起因しているのではないかというような気づきがあったということですか。

今井 おっしゃるとおりです。

西田 政治に飛び込むというのは、思いはあってもなかなか決意できないと思うのですが周囲の理解など苦労されたことはありますか。

今井 最初、選挙、政治の世界に入りたいと夫に言ったのですが、やはり反対をされました。しかし私がこうしたいという思いを貫いて本当に毎日話し合いを重ねた結果、夫も応援するよというふうに転じたので、一生懸命がんばって信念を貫きたいなと思っています。

西田 熱意が伝わったのだらうと思います。小さな子どもさんがいらっしゃるんで、なかなか政治活動も自分の思うようにならない部分もあるかと思うのですが、それも実態として訴えていただければなというふうに思います。今までインタビューさせていただいた女性の現職議員さんはみなさん同じことをおっしゃいます。「女の人に何ができるんや」と言われたとか、立候補すると言ったら、「え？夫じゃないの」と言われたとか、も

っとひどいと「女のくせにそんなことするの」と言われた経験をみなさんお持ちで、それが腹立たしい、男女間の差別であるとみなさん経験されているのですが、そんな背景などはなかったですか。

今井 周りの方に、「えーっ、旦那さんかわいそう」というようなことはよく言われました。

西田 そういった社会意識を変えるきっかけに今井さんの決意がなればと思います。今年に入ってコロナが感染拡大をして国の施策、県の施策、それから市町村の施策というのがあるのですが、お住いの櫃原市の中でもいろんなことが起きていますが、コロナ禍についてどのような考えとか感想をお持ちですか。

今井 まずは今回の5月に発出された緊急事態宣言において学校が休校になったり、飲食店で働いていたのですが休業要請に伴ってパートの仕事が完全になくなってしまったので収入はもちろん減りました。子どもの学校がお休みということで朝昼晩ずっと一緒に過ごす中で食費も給食がないというだけで大変でした。長い夏休みという感覚ではもちろんないのでおうちで過ごす工夫というのも大変だったというのがまず一つと、緊急事態宣言が明けてから学校が始まるとなった時、学習要領は見直されず、夏休みが短縮になるということで子どもが一番影響あったのではないかと

というのを目の当たりにしました。授業もものすごく早く進みますし、宿題の量は多いです、うちの子は小学校一年生なのですが、やはり宿題とか勉強というものがまだ身につけていない状況の中で休校になった。それを課題だけ出してお母さんが先生代わりに「勉強ってこんなんなんだよ」と教えながらやらなければならない大変さ。私はたまたま職場がお休みになったので、つきっきり子どもを見ることができましたが、そんな中で働きに出なければならないお母さん方、親御さんの方もおられたでしょうし、そういう人にとっては家事と育児と仕事の両立というのは大変だったのではないかなと思います。

西田 いわゆる非正規職場で働く、不安定な雇用で働く人たちに一番影響があったのではないかとされていますし、去年の今頃と今年とでは不安定な雇用で働く人たちが 130 万人減った。もともと非正規職場で働いている方 7 割が女性で、女性が一番影響を受けた。今井さんの場合は今お話ししていただいたように子どもの学習権の保障などが突如として奪われた。暑い夏だからクーラーを設置しようということで奈良県内でもそういう動きがありましたが、今回コロナ禍でお休みになり、今度は夏休みが短くなって暑い時に出なければならなかったなど、そんな現状も経験され、おかしいなと思うこともたくさんあったと思います。そういう意味で来

年挑戦されることにそういったことも反映していただければと思います。
政治をめざされ、男女の格差解消など、そういった政策でやってみたいと
いうことはありますか。

今井 男女平等の時代が言われてからずいぶん経っていますけどもやはりまだ
まだ男性がお仕事、女性が家事育児という世の中の流れは変わっていない
のかなと感じるので女性の社会進出はもっとこれから取り組んでいか
なければならぬことだと思うのですが、まずはやはり子どもを安心して
預けられる環境が整ってこそその社会進出だと思うので、ずっと言われ
ている待機児童というものをゼロにしていかなければ、そこなくしては
女性の社会進出はなかなか難しいのかなあと子育て世代としては思いま
す。

西田 働いている女性の半分が一人目の妊娠・出産で仕事をやめているという
現状があります。待機児童の解消というのは大きな課題だと思います。今
後、特に子育てや働くお母さんの分野を重点的に活動していきたいとい
うお話だったと思うんですけども政治家になられるとその分野だけでは
なかないかない部分もあるかとおもいます。違う視点でこういうことも
やっていきたいということはあるですか。

今井 全国的にもそうだと思うのですが、高齡化社会が進んでいる中でお年

寄りの免許返納というのがすごく問題にされています。免許返納を進めるということは高齢者の方の交通手段が無くなるということで、そういうところをしっかりと整備した上で進めるのが筋かなと思います。返納を進める一方で交通網というものをしっかりしていきたいなと考えています。地図を見て交通過疎地域を洗い出し、そこに必要であればバスの配置であるとかタクシーのチケットをお配りするなどを考慮した上でできる限りで進めていけたらいいのではと考えています。

西田 それは本当に私も共感します。自分も経験するのですが、反射神経が鈍ってきたりするので危ないなというのはわかるのですが、返納するだけで解決するのかなとは思いますが。東京や大阪の便利なところではもしかすると車が無くても数分のところに病院があったりということがあるかもしれないけれども、奈良県の中ではなかなか車無しの生活というのは買い物もできないということもあるので、その辺は本当に大事にしたいと思っています。それを実現するには橿原市の財政の問題も大きな課題かと思っていますので、ぜひ視野を広げて来年挑戦していただきたいなと思います。お話をうかがっているといきいきときらきら輝いている、そんなふうだと思います。とても期待しておりますのでぜひがんばってください。